HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	黒沢清、映画のアレゴリー［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	阿部, 嘉昭
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7069号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74063
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Casio_Abe_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　阿部　嘉昭

学位論文題名
黒沢清、映画のアレゴリー

・本論文の観点と方法

本論文は現代日本を代表する映画監督、黒沢清の作家性を総合的に考察するモノグラフである。当の研究対象を検討するにあたって作動させる中心的概念はアレゴリーである。本論文は、文学におけるアレゴリーの諸相をめぐる検討から、映画におけるアレゴリーの諸問題についての検討へと議論を進め、ジョセフ・ロージやピエル・パオロ・パゾリーニの作品に具現化される「アレゴリーの映画」から「映画のアレゴリー」を峻別する。映画作品がひとつの寓意を表現するといったような「アレゴリーの映画」と異なり、必ずしもひとつの寓意をもつわけではない映画作品が、にもかかわらずナラティヴや時間・空間の構築といった映画表現の面において「Ａニナゾラエテ Ｂヲ言ウコト」といった事態を生起させるときに、「映画のアレゴリー」が、とりわけ映画の特質に即した「運動のアレゴリー」が稼動しはじめる。それを黒沢清作品の主たる特性とみなした本論文は、「カフカやベンヤミンと相渉る一級の寓意家（アレゴリカー）で、しかもその寓意性が映画性に限局される特異さをもつ」として、黒沢清の作家性に迫り、初期から近年にかけての主要作品を重層的かつ高密度に考察する。

・本論文の内容

本論文は、論文全体にかかわるアレゴリー概念の整理・再検討と、映画におけるそれの適用についての記述および黒沢清作品における「運動アレゴリー」の提示からなる序章と、初期劇場公開作から 2017 年公開の『散歩する侵略者』までの主要作品をそれぞれ検討する七つの章、および論文の全体的論旨をまとめる終章によって構成されている。

序章は、文学におけるアレゴリーから映画におけるアレゴリー、さらには黒沢清作品におけるアレゴリー的相貌へと議論を進める。ラ・フォンテーヌ的なアレゴリー、寓意画（エンブレム）から延長しうる可視的エンブレム、カフカ的アレゴリー、ベンヤミン型アレゴリー、「運動アレゴリー」と、計五つのアレゴリー事象を順次に検討するとともに、黒沢清がいか

にカフカやベンヤミンとも相渉る寓意家（アレゴリカー）でありうることを論証する。

第一章は黒沢清初期の劇場公開作『神田川淫乱戦争』（1983）と『ドレミファ娘の血は騒ぐ』（1985）を俎上に載せて、両作品における代理と交換の具体的な相貌を検討する。前者の作品をめぐって性愛表象における代理の描写、深夜の渡河シーンにおける可視性と不可視性の錯綜、クライマックス・シーンの長回しにおける「運動アレゴリー」の生起といった事象を、後者の作品をめぐってはとりわけ 1960 年代のゴダール映画にみられる諸手法にも通じる映画表現の事象を、「映画のアレゴリー」において具体的に検証する。

第二章で考察の対象となるのはビデオ作品『蛇の道』（1997）である。高橋洋によるオリジナル脚本に照らして黒沢清の演出による同作品が「人間」や「文学性」を捨象していることを確認したうえで、本章は同作品の物語の骨子をなす「代理報復」について、大和屋竺と斎藤竜鳳との論争や、大和屋が中心となった、鈴木清順のための魯迅「鋳剣」の脚本化といった映画史的な文脈を検討する。また、大和屋脚本、鈴木清順監督による『殺しの烙印』が召喚されていることを確認する。最後に、『蛇の道』と「二本撮り」で製作された『蜘蛛の瞳』をめぐる考察も付け加えている。

第三章は『CURE』（1997）論である。犠牲者の生成、記憶の消散、代理者に殺人を犯させている者の「中心の空白」、「留保つきアレゴリー」など、本作品の具体的な場面から中心的な働きをする諸事象を記述し、カフカの作品などに照らして考察を加える。

第四章は 1999 年に製作された『カリスマ』をめぐる考察に充てられる。アレゴリーの評論家、花田清輝による『復興期の精神』で提示された「選択」の問題にも接続されうる「一本の木」か「森全体」かという本作の設問に関する考察から、本章は本作にみられる語りの速度、抒情を絶縁したシーンつなぎ、「過剰命名」（ベンヤミン）について検討を重ねる。また、本作における活劇の展開に関しては、ドゥルーズ『シネマ１』で議論された行動イメージにおけるフィギュールの問題に関わらせつつ、言語の比喩と活劇の「動き」の展開との関連性を記述し、「選択」にたいする行動の生起を契機に「活劇の復権」がなされることを指摘する。

主として『LOFT ロフト』（2006）を考察対象とする第五章は、まず『ドッペルゲンガー』（2003）における人工身体（機械）の様相を点検する。本作を黒沢清のフィルモグラフィ中、機械状映画の最初の達成とみなす本章は、ドッペルゲンガーの出現に伴う、左右が曖昧な中間域を挟みこむ三分割中心の機械状マルチ画面を分析し、それを、格言の不成立により、語られた物語とその後に期待される格言が統一的な一対とならないと

いったかたちのアレゴリー（本章はそれを「真のアレゴリー」と呼ぶ）に通じるものとみる。また、本作における物語空間の捩れを「映画機械」の「誤作動」として具体的に記述する。次に、ミシェル・カルージュがカフカ「流刑地にて」における処刑機械を念頭に指摘した「独身者の機械」の系譜を提示したうえで、『LOFT ロフト』におけるミイラ／幽霊、人間／ミイラの関係性、「浚渫機械」、機械運動の反復、回想と機械的反復といった諸事象をめぐって、作品における具体的な描写に即しつつその真相と作動原理を究明しようとする。

つづく第六章は映画『クリーピー・偽りの隣人』（2016）とその原作、前川裕のミステリ小説『クリーピー』との比較考察からスタートする。アレゴリーはアレゴリー対象とアレゴリー作用に分離されうるが、後者は前者を排除し、独立して逸脱にまで発展することもありうるというポール・ド・マンの指摘を提示し、黒沢の映画と前川の原作との脱構築的な関係を指摘する。また、とりわけ「身振り」の特異化によって起こされる、動物の擬人化という伝統的なアレゴリーの手法と異なる「人間の擬人化」なる事象、およびそれと連動する、空間表象における異常さの実態を記述し、隣接と近似の諸局面を分析する。「人間の擬人化」は最終的に「偽りの隣人」を演ずる「香川照之は香川自身に似ていない」という局面へと進むことを本章は最後に確認する。

第七章の『散歩する侵略者』（2017）論は、まず黒沢が意図する「怖くないホラー」への脱構築的な志向を確認する。また、「概念を奪う」という事象を検討したのち、並行モンタージュの使用にもみられる、出来事が「歩行」するような叙述形式が、作品のタイトルにある言葉＝「散歩」に響き合うことを検討する。さらには、映画史上の過去の映画、とりわけ黒沢自身の作品の細部を、「走馬燈」のようにちりばめてゆくことから、本作は監督作品の総決算となり、以後黒沢作品が転機を迎えていくだろうことを指摘しながら、黒沢映画がカフカから別天地への飛躍を志向すると同時カフカに拘りつづけるであろうことを確認する。

終章はこれまでの論証で明らかにしようとした諸項について改めて記述しなおすとともに、映画作品の細部の点検に拘りつつ議論を展開させていく本論文のアプローチの必然性、および映画論執筆における初見時体験の価値を強調し、黒沢清論、ひいては映画論のあり方について示唆を綴る。